

まちづくりにおける社会的共有資本の役割に関する研究

—帯広の森の事例研究を通して—

鈴木 貢

抄録: 本研究は、まちづくりの基盤を成すものを社会的共有資本として捉え、その役割について考察することを目的とする。社会的共有資本とは、社会を持続的に維持することを可能にし、地域に住む人々が共有する社会的装置として考える。帯広の森の事例研究を通して、社会的共有資本の連携・蓄積が、市民活動を活性化し、好循環が生まれ、持続可能なまちづくりの進展を可能とすることを明らかにできた。地域を維持する力としての社会的共有資本は、まちづくりの基盤を支える豊かな関係性の源泉として重要な役割を果たしている。

1. はじめに

帯広の森づくりは、「帯広市総合計画（1959年）」の近代的田園都市構想に始まり、「第2期帯広市総合計画（1971年）」で具体的な計画として歩みだし、帯広の森市民植樹祭（1975～2004年）、帯広の森市民育樹祭（1991～2005年）を経て、新たな段階を迎えている。帯広の森づくりは、帯広市にとってまちづくりの中核を担う活動である。本研究では、帯広の森づくりについて、近代的田園都市構想から植樹祭までを初動期のまちづくりとして捉え、社会的共有資本の役割という観点から分析する。その事例研究を通して、「主体」・「しくみ」・「目標像の共有」を分析視点とし、持続可能なまちづくりにおける社会的共有資本の役割を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

帯広の森のまちづくり活動を明らかにするため、1999年～2010年にかけて帯広市役所、市民植樹祭・市民育樹祭実行委員会、エゾリスの会（市民団体）においてヒアリング調査を実施した。ヒアリング調査の実施に当たっては、帯広の森づくりに関わる様々な活動・市民団体の動向等について、最新の情報を収集することを目的とした。その際に、帯広の森に関わる資料等を収集した。主な資料は、『(帯広の森 20 年史) 帯広の森—私たちと帯広の森づくり』、『帯広の森協議会資料』などである。また、植樹祭（2003年）や帯広の森 30 周年記念シンポジウム（2004年）などの活動にも参加し、帯広の森に関わる多面的な活動の情報収集を行った。

3. 社会的共有資本

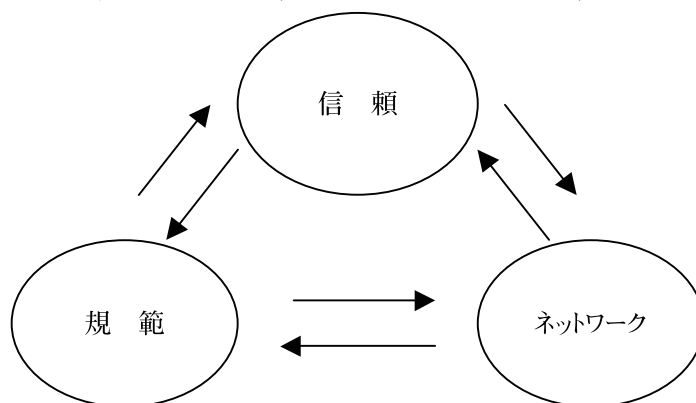
(1) 社会的共有資本とは

宇沢弘文（2000）は、社会的共通資本の理論を展開した。社会的共通資本とは、「一つの国ないし特定の地域に住むすべての人々が、ゆたかな経済生活を営み、すぐれた文化を展開し、人間的に魅力ある社会を持続的、安定的に維持することを可能にするような社会的装置」¹⁾である。ここでは、社会的共通資本という宇沢の理論を参考に、まちづくりに焦点を絞り、社会を持続的に維持することを可能にし、地域に住む人々が共有する社会的装置として、「社会的共有資本」を考える。社会的共有資本とは、地域に住む人々が共有する社会的装置である。その構成要素は、まちづくりにおける「不可視的なもの」と「可視的なもの」という二つの範疇で考え、ソーシャル・キャピタル（「信頼」・「規範」・「ネットワーク」）を「不可視的なもの（見えないもの）」として、地域の人材・地域空間のハードなもの・まちづくり活動を「可視的なもの（見えるもの）」として捉える。

(2) 見えないもの（ソーシャル・キャピタル）

ソーシャル・キャピタルは、近年地域づくりの分野で注目されている概念である。その概念について、宮川公男（2004）はパットナム（Putnam）^{注1)}の定義を次のように紹介している。ソーシャル・キャピタルとは「協調的行動を容易にすることにより社会の効率を改善しうる信頼、規範、ネットワークのような社会的組織の特徴」と定義し、「そのような社会的組織のなかで頻繁に相互作用する人々の多様な集団において生まれるのが、『一般化された互酬関係』という規範」²⁾である。宮川公男は、「信頼、協力とかネットワークのようなソーシャル・キャピタルの蓄積プロセスは、プラスのフィードバックの働く自己強化的かつ累積的になる傾向がある。そして市民性の豊かな社会ではそのプロセスは好循環的なもので、高水準の協力、信頼、互酬性、市民参加、全体的福祉の社会的均衡が実現される。それに対して市民性の乏しい社会では背信、不信、責任回避、搾取、孤立、沈滞が相互に強化しあう悪循環のプロセスが働き、もう1つの低次の社会的均衡がもたらされる」³⁾と述べている。

図1 見えないもの（ソーシャル・キャピタル）の構造



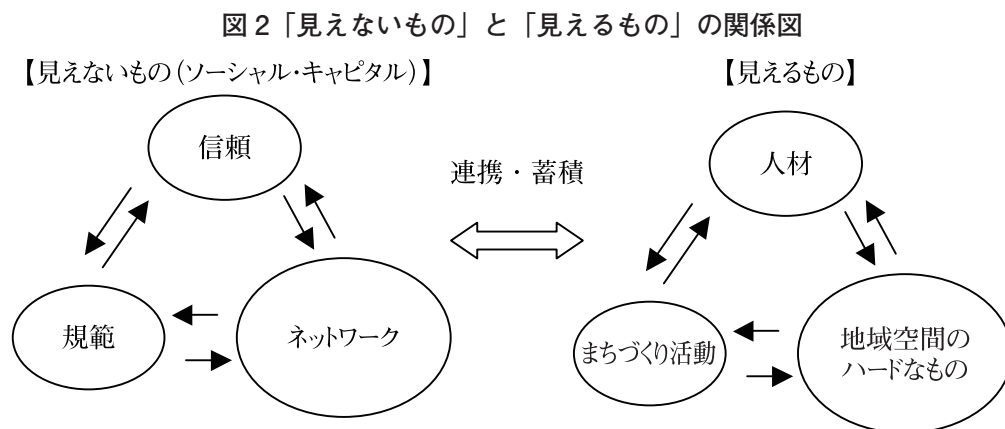
『出所：内閣府国民生活局（2003）』⁴⁾

(3) 見えるもの（地域の人材、地域空間のハードなもの、まちづくり活動）

本研究における「見えるもの」とは、①地域の人材、②地域空間のハードなもの、③まちづくり活動、

などの社会的共有資本の可視的なものである。「見えるもの（可視的）」と「見えないもの（不可視的）」の連携により、まちづくりの基盤（社会的共有資本）が形成されるものとする。両者の関係図が図2である。

本研究では前述のように、地域づくりの基盤に存在する社会的共有資本は、①見えないもの（ソーシャル・キャピタル）と②見えるもの（地域の人材、地域空間のハードなもの、まちづくり活動）により形成される。両者の連携・蓄積により地域を維持する力（社会的共有資本）が形成され、ソーシャル・キャピタルの機能が発揮される。社会的共有資本を、①見えないものと②見えるものとして捉えることによって、「人材・活動・場」を一体的に考えることができる。社会的共有資本とは、まちづくりを発展させる原動力と考えることができる。



4. 初動期のまちづくり

帯広の森の事例研究を通して、初動期のまちづくりの構造（「主体」・「しくみ」・「目標像の共有」）を検討する。「主体」・「しくみ」・「目標像の共有」については、以下のように定義する。

- ①主体：まちづくりを主導して担っていくもの（組織・人）
- ②しくみ：まちづくり活動の方法
- ③目標像：地域住民の共通理解に基づく課題

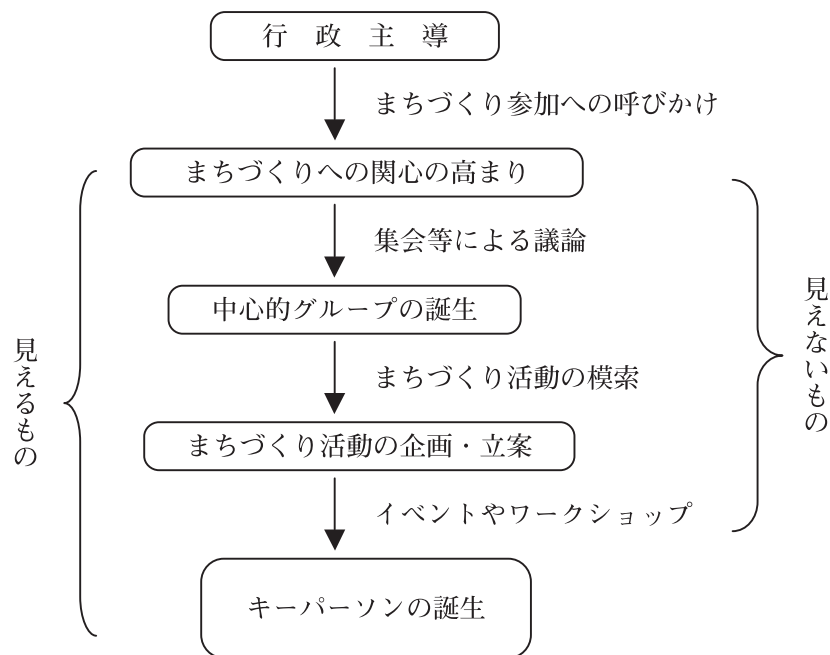
各節では、「主体」・「しくみ」・「目標像の共有」について概説し、次に具体的な活動について考察する。

4.1 まちづくりの主体

(1) まちづくりの主体

初動期のまちづくりは、行政主導のまちづくりからの脱却を目指してまちづくりに関心のある市民の有志がまちづくりへの参加を呼びかけ、イベントやワークショップ等を開催して課題を共有する中から中心的なグループが誕生する。その中心的なグループから、キーパーソンが誕生し、まちづくり運動を主導していく。初動期のまちづくりは、このような経過をたどるものとする。

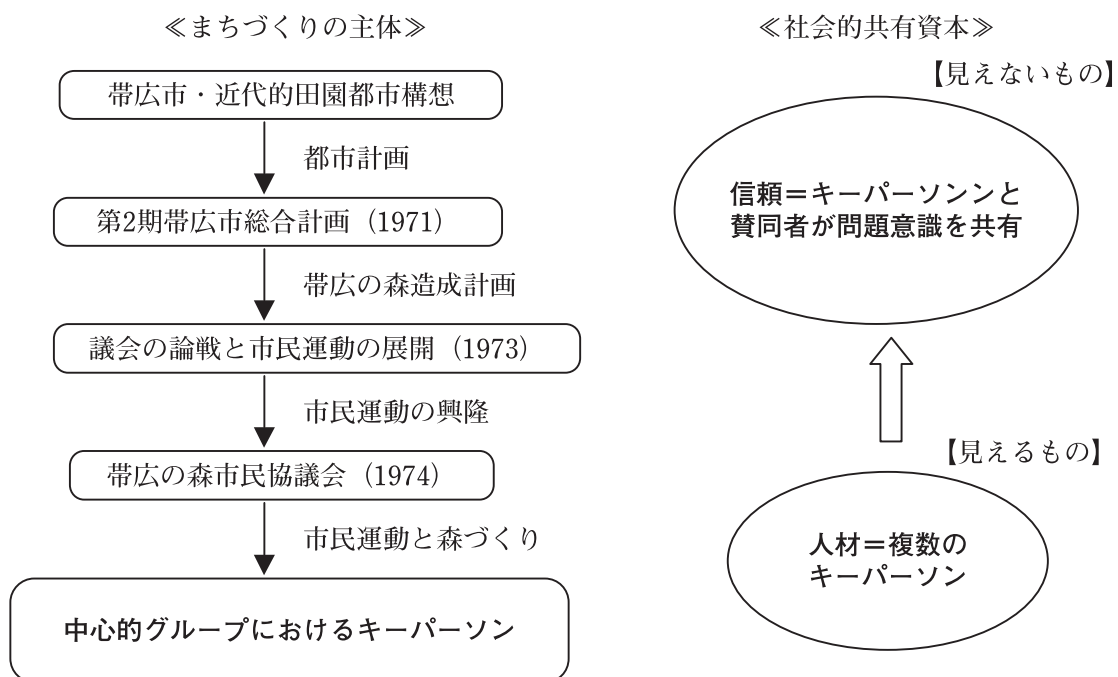
図3 初動期のまちづくりの主体



(2) 帯広の森におけるまちづくりの主体と社会的共有資本

帯広の森における初動期のまちづくりは、行政主導の森づくりから市議会での論戦を経て、市民の側にも森づくりに対する関心が高まっていった。そのプロセスで市民団体等の交流も深まり、中心的なグループにより市民協議会が結成され、まちづくりに対する課題の共有化が図られた。この時期の主体は、キーパーソンである。

図4 まちづくりの主体と社会的共有資本

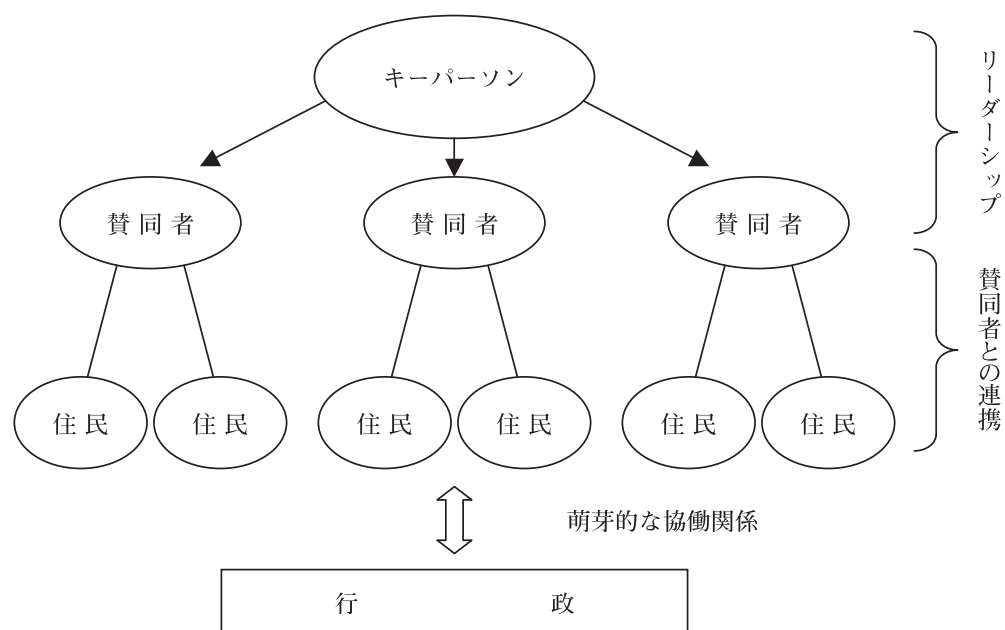


4.2 まちづくりのしくみ

(1) まちづくりのしくみ

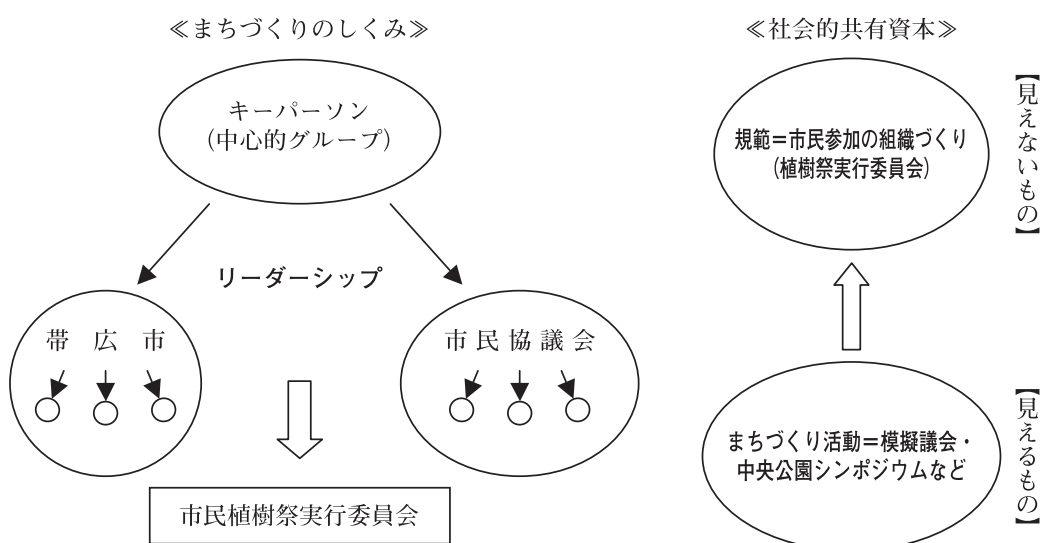
初動期のまちづくりにおいては、まちづくりに関心を持つ人々が集い、イベントやワークショップの開催を通して課題を共有していく。その取り組みの中からキーパーソンが誕生し、キーパーソンが賛同者と連携し、賛同者が周囲の住民をまちづくりに巻き込み、まちづくりは広範な理解を得ることを目指して活動を展開する。この時期のまちづくりのしくみは、キーパーソンのリーダーシップである。

図5 初動期のまちづくりのしくみ



(2) 帯広の森におけるまちづくりのしくみと社会的共有資本

図6 まちづくりのしくみと社会的共有資本



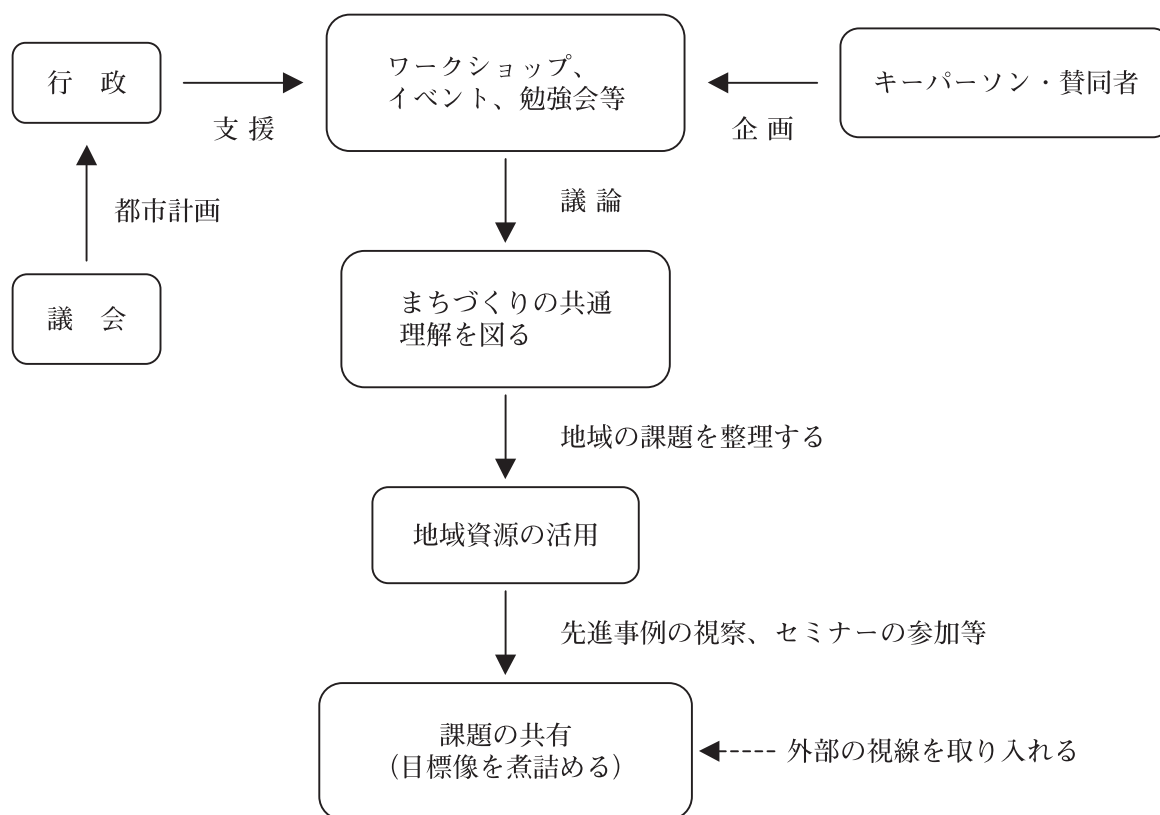
帯広の森における初動期のしくみは、まちづくりに関心のある市民が集い、まちづくり運動を主導していく中心的グループを結成し、森づくりへの理解を深めるためにイベントやワークショップを企画・立案していった。1974年、帯広の森模擬議会や中央公園シンポジウムなどを開催し、1975年の第1回帯広の森市民植樹祭へとまちづくり運動をリードしていった。この時期のまちづくりのしくみは、キーパーソンのリーダーシップである。

4.3 目標像の共有

(1) 目標像の共有

初動期のまちづくりにおいては、目標像の共有は重要な課題である。しかし、その課題を共有するためには、様々なプロセスを経て得ることができるものであり、時間の経過と共に変化していくこともあり得る。初動期では、キーパーソンや賛同者が企画するワークショップやイベント、勉強会等を通してまちづくりに対する共通理解を図っていく努力が積み重ねられる。様々な場面において活発な議論を展開し、地域における課題を整理する。日常では見過ごしている地域資源を見直し、その活用を討議することによって、目標像を煮詰めていく。この時期の目標像の共有は、まちづくりの課題を共有することが重要である。

図7 初動期の目標像の共有

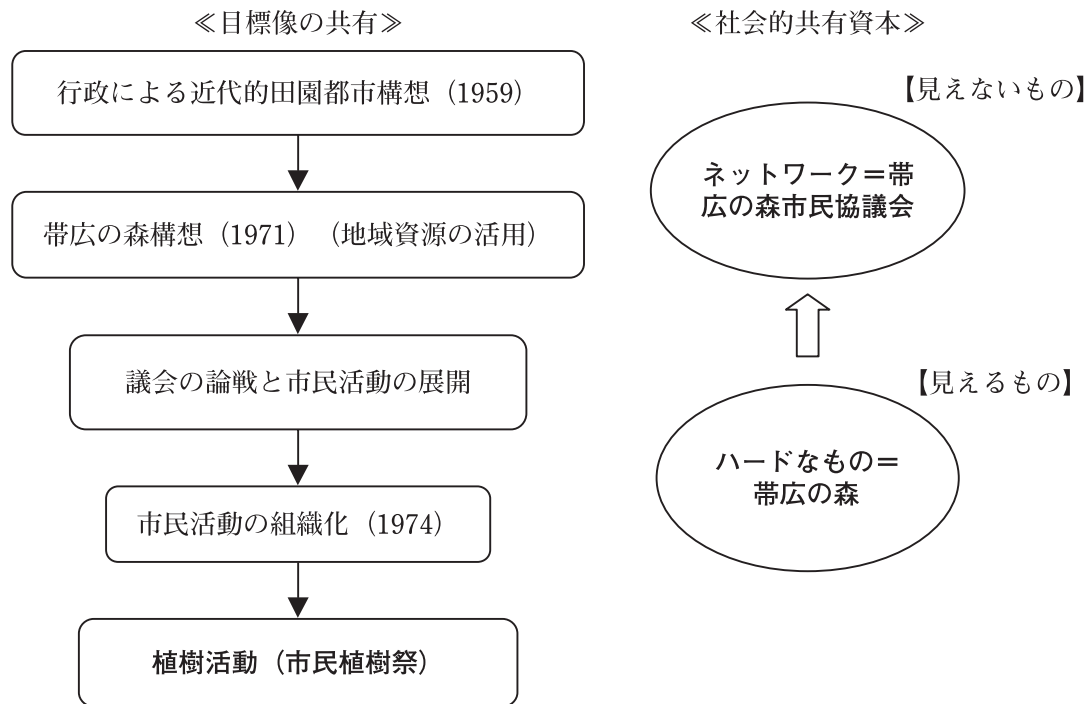


(2) 帯広の森における目標像の共有と社会的共有資本

帯広の森における目標像は、行政主導で始まった。近代的田園都市構想は、十勝の豊かな自然の活

用を目指した都市計画である。その構想は、帯広の森構想として具体化した。その後、帯広の森構想は議会での激しい論戦を経て、市民を巻き込む広範な議論を喚起した。市民団体も連携を図りながら、森づくりへの運動の渦中に加わっていった。何人かのキーパーソンが、まちづくりの課題の共有を図るために、市民組織を立ち上げ、イベントやシンポジウムの開催を通して共通理解の促進のために奔走した。その成果が帯広市における森づくりの課題の共有に繋がり、市民植樹祭の開催に結実した。

図8 目標像の共有と社会的共有資本



5. まとめ（初動期のまちづくりと社会的共有資本）

（1）帯広の森における社会的共有資本

【初動期の見えないもの＝ソーシャル・キャピタル】

①信頼：初動期の信頼関係は、行政とキーパーソン（市民）のボランタリーな協働関係の促進により形成された。キーパーソンに対する信頼関係が、初動期のまちづくりを主導し、賛同者の広がりを可能としたのである。その広がりが、市民運動の興隆を生んでいった。

②規範：信頼関係を礎として、市民運動の興隆を背景に模擬議会やシンポジウムが開催され、課題の共有化に大きな効果を上げ、市民の間に森づくりへの共感が形成された。

③ネットワーク：森づくりへの共感が広がるにつれて、市民（団体）の繋がりも深まり、帯広の森市民協議会が結成された。

【初動期の見えるもの＝①まちづくりの活動を担う地域の人材、②地域空間のハードなもの、③まちづくり活動】

「見えるもの」は、①行政と市民のキーパーソン、②帯広の森、③市民植樹祭、である。帯広の森づくりは、帯広市民にまちづくりのシンボルとして定着していった。

表1 帯広の森における社会的共有資本

	見えないもの（ソーシャル・キャピタル）			見えるもの
	信 頼	規 範	ネットワーク	
帯広の森づくり	行政と市民の キーパーソン	模擬議会と中央 公園シンポジウム	帯広の森市民協 議会	キーパーソン 帯広の森 市民植樹祭

(2) 初動期のまちづくりと社会的共有資本

事例研究を通して、初動期のまちづくりの枠組みである「主体」・「しくみ」・「目標像の共有」と社会的共有資本との密接な関連が明らかになった。

図9 初動期のまちづくりの構造

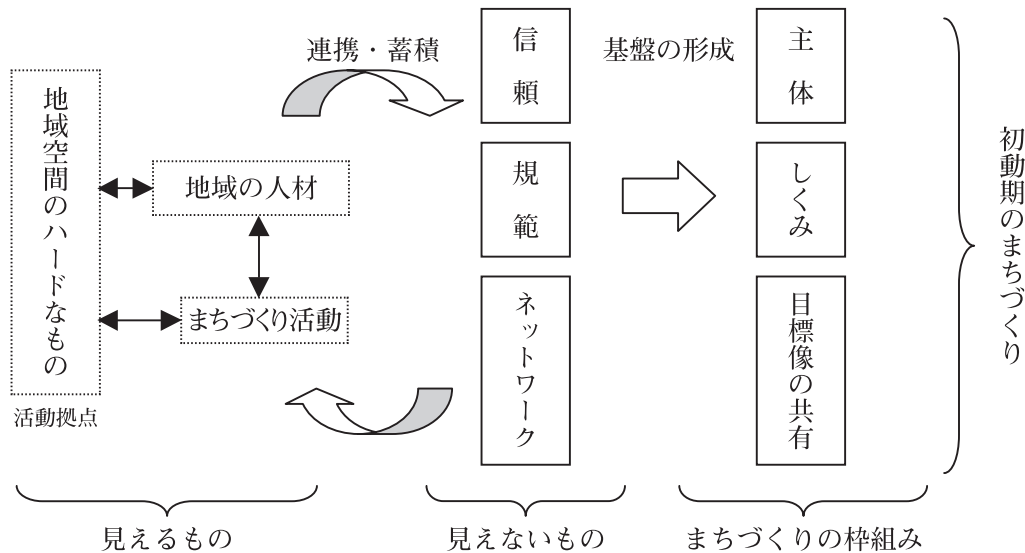


表1の分析に見られるように、地域を維持する力としての社会的共有資本は「見えないもの」と「見えるもの」によって構成されている。初動期のまちづくりの基盤は、両者の連携・蓄積により形成される（図9）。また、「見えるもの」は「見えないもの」を形成する活動として機能している。特に、「見えないもの」であるソーシャル・キャピタルは、まちづくりの基盤を支える豊かな関係性の源泉として重要である。ソーシャル・キャピタルの基盤を厚くすることが、持続可能なまちづくりに不可欠な要因となる。そして、社会的共有資本を「見えないもの」「見えるもの」として捉えることによって、持続可能なまちづくりの進展の基盤には何が必要であるかが明らかにできた。まちづくりの分析における社会的共有資本の役割を通して、まちづくりの基盤を形成する「人材・活動・場」を一体的なものとして考えることができた。社会的共有資本の連携・蓄積により、「見えないもの」と「見えるもの」との関係性を豊かにしていくことが持続可能なまちづくりにとって不可欠な課題である。

注

- 1) パットナムは、ソーシャル・キャピタルという概念の提唱者である。『Bowling Alone（孤独なボウリング）』において、アメリカの共同体の衰退を論じて大きな反響を巻き起こした。

引用文献

- 1) 宇沢弘文：『社会的共通資本』 p.ii 岩波書店 2000.
- 2) 宮川公男：「ソーシャル・キャピタル論」『ソーシャル・キャピタル』宮川公男・大守隆（編） p.21 東洋経済新報社 2004.
- 3) 宮川公男：「ソーシャル・キャピタル論」『ソーシャル・キャピタル』宮川公男・大守隆（編） p.25 東洋経済新報社 2004.
- 4) 内閣府国民生活局：『ソーシャル・キャピタル；豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて』 p.2 独立行政法人国立印刷局 2003.

参考文献

- 1) 鈴木貢：「北海道における協働型まちづくりの構造に関する研究」『北海道文教大学論集』 No.8 pp.1-14 2007.
- 2) ロバート・D・パットナム（Robert D.Putnam）：『孤独なボウリング（Bowling Alone）－米国コミュニティの崩壊と再生』（柴内康文 訳） 柏書房 2006.
- 3) 佐藤滋：「まちづくりのプロセスをデザインする」『まちづくりの方法』日本建築学会編 p.53 丸善 2004.
- 4) 鈴木貢：「帯広の森と協働のまちづくり」『日本建築学会技術報告集』 第18号 pp.303-306 2003.
- 5) 帯広の森20周年記念実行委員会：『（帯広の森20年史）帯広の森－私たちと帯広の森づくり』 1995.

A Study of the Role of Social Common Capital in Town Development : Through a Case Study in the Forest of Obihiro

SUZUKI Mitsugu

Abstract: This study, based on the theory that social common capital constitutes a basis of town development, aims to deepen understanding of its role in communities. Social common capital is considered “social equipment” shared by people living in communities together : It makes it possible to continuously maintain a cohesive society. Through a case study in the forest of Obihiro, the connected and accumulated social common capital has fostered other civic activities; it has given birth to a vital community and has enabled progress toward a sustainable town development. Social common capital, as a demonstrated power of a sustainable society, is also the fountainhead of deepened relationships supporting town development.